

中世のmieについて：否定文の成立を巡って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅野, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000458

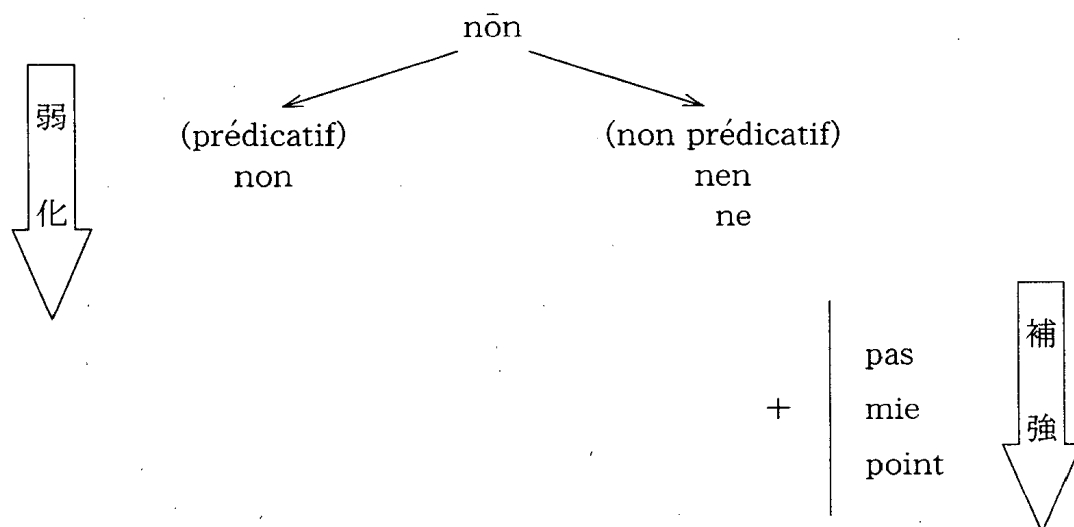
中世の mie について —否定文の成立を巡って—

浅野 幸生

本稿では、中世フランス語において頻繁に用いられていた否定の補助詞(Auxiliaire de négation) **mie** について考察する。この語は他の補助詞と同様に、中世において完全な実質を持つ名詞から純粹に否定を表す機能語となったが、その後主役を他の語に譲り現在まで伝わっていない。実際の変化の状況がどのようなものであったのかを、当時の文学テキスト中の実例を通して探りたいと思う。

1. non から ne へ

フランス語はその発展過程の中で、二つの辞項 (terme) によって否定を表現する形式を確立してきた (ne ... pas, point, jamais, etc.)。生みの親であるラテン語では nōn 一語だけで否定を表していたのだから、この間には単なる音声変化ではない形式面の変革が起こったと考えられる。しかしながらこの現象は、記号素の分離ないしは添加といった単純な原理で説明できるものではない。というのは、この二つの段階の間の変化には記号の〈弱化 (空洞化)〉と〈補強 (充填)〉という異質な過程が含まれているからである。



デンマークの文法学者 O. イェスペルセンが指摘したように、フランス語は否定表現の発展において英語とよく似た軌跡をたどった。⁽¹⁾前身のラテン語の段階で強勢可能な *nōn* が単独で動詞の前に置かれ、それがその後文中での環境により強勢形と無強勢形に分かれ結果的には後者の方がそれ以前には予想もできないような理由によって一般化していった。というより、二者がその後次第にそれぞれ独自の活躍の場を獲得していったと言う方が正しいであろう。現代語の *non* は、不同意の返事以外に述辞（動詞）以外の語句を否定するのに用いられる。その際 *non* 自体が述辞の代わりをすることも考えることができる。もちろんこの役割分担は、長い年月をかけて少しずつ形成されていったのである。⁽²⁾

軽量化した *ne* は 12 世紀までは単独で用いられることが多かったが、次第に他の補助詞を伴うことが多くなった。この傾向は文語より口語で先に現れ広まったが、慣用として定着するには相当の年月がかかった。⁽³⁾話し言葉はいつも革新的で、書き言葉はいつも保守的である。現在でも例えば、一部の動詞や (*je ne sais ; je ne puis ; je n'ose*)、擬古的な成句や (*à Dieu ne plaise ; n'avoir cure de*) 特定の叙法や環境において (*je ne saurais dire ; je n'aurais garde ; qui ne le sait?*) *ne* の単独使用が見られる。これらは程度の差こそあれ文語的で古い時代の名残であり、*ne* はそれだけで明瞭な否定を表すには役不足である。その証拠に、*ne* を伴わず *pas* のみで否定を表すことが、口語において近年とみに一般化している。しばしば誤解されるように否定は肯定の裏方などではなく、むしろ情報量の多い積極的な一言語学の用語を使えば「有標の」一表現なのである。

2. 否定の補助詞について

本来の否定辞（フランス語の *ne*、英語の *not*、日本語の「ない」）に何らかの言葉を添える傾向は普遍的であろうし、その添えられる言葉にもある傾向が見られる。添えられる言葉（つまり補助詞）の第一義的な機能が強調であるならば、その言葉は、否定される言葉の範疇における典型的に小さいものであったり現実性に乏しいものであったりするの自然なことであろう。「微塵も…無い」「露程も…ない」「影も形も…（見え）ない」「おくびにも…（出さ）ない」等々、繰り返し使われれば慣用句になることも多いが、「米粒ほども…」「蚊に刺されたほども…（感じ）ない」など各人の想像力に任せて作り出す余地のある部位である。

否定の表現をより生き生きとしたものにするために本来の否定辞に補助詞を加えた場合、我々は否定された述辞（一般的には動詞か形容詞）と補助詞の間

の意味的つながりに興味を持つ。存在を否定するとき、最も小さい（と、その表現が生まれた時点でそうとらえられていた）「微塵」すら無いのだから、ましてやそれ以上大きいものなどあるはずもないでしょう、というレトリックを使うのである。同様に、何かが見えないときは一番見えにくいものを引き合いに出し、何も感じないことを主張するときにはたいていの人が平気だと思ふことを敢えて引き合いに出す。日本語というのはこの種の表現が特別豊かな言語であるように思えるが、同種の発想はどの言語でも程度の差こそあれ見られると考えるのが自然ではないだろうか。

フランス語の話に戻れば、源流であるラテン語においても補助詞的要素は確認される。古典派の作家 Cicero にも、ne ... **punctum** 「一瞬も…ない」、non ... **transversum digitum** 「指の幅ほども…ない」などの表現が見られる。⁽⁴⁾ただこれらは否定辞の *nōn* などといつも一緒に現れるわけではなく（つまり慣用句ではなく）、その時々[・]の筆者の興によって一より正確に言えば、強調したいなどの文体的動機から一否定辞に添えて用いているわけで、その意味でどんな言葉を用いるか（あるいは用いないか）は個人差が大きい。現代フランス語では、前述のいくつかのケースをのぞいて、否定文では〈ne + 補助詞〉が正式な用法であり、何ら特別なニュアンスを加える必要が無い場合には *pas* を用いるということまで決まっている。一見同じように見えても、両者の間には本質的な違いがある。

最古のフランス語文献と言われる『ストラスブールの誓約』（842）にも次のような例が見られる。

Et ab Ludher *nul* plaid *nunquam* prindrai qui （イタリックは筆者。以下同様。）

現代語に直訳すると、et je (ne) prendrai jamais nul accord avec Lothaire qui ... となり否定辞の *nul* が副詞 *nunquam* で補強されている。その約 40 年後に書かれた『聖女ウーラリの続唱』では、まだ強勢形の *non* が述辞の否定に用いられていた時代であるが、単独の場合と補助詞付きの両方のケースが確認される。

Niule cose *non* la pouret *omque* pleier

La polle sempre *non* amast lo Deo menestier.

次の例は 11 世紀中頃の『聖アレクシス伝』からのものである。

Ço ne volt il que sa mere le sacet:

ここで無強勢形の *ne* が登場していることは注目すべきであるが、補助詞は併用されていない。ところが 12 世紀に書き直された同じ部分には、補助詞として *mie* が使われている。⁽⁵⁾

Il *ne* veult *mie* que sa mere le sace:

ここにはわずか 1 世紀ほどの間にこの言語に起こったことがいくつか見て取れる。否定についても、特定の補助詞が使われる傾向がはっきりと見えているのである。⁽⁶⁾

3. 中世における *pas* と *mie*

中世において *ne* と共に否定を形成する補助詞の数は現在よりも多かった。*pas*, *mie* 以外に *mes*, *onques*, *ja*, *ainc*, *gueres*, *point*, *goute*, *rien*, *chose*, *ame*, *nient* などがあったが、その後の歴史の中で重要な位置を占めたのは *mie*, *point*, *pas* である。

実はこの三語は元々名詞であった。

<i>mie</i>	<	<i>mica</i> (L)	小粒、少量
<i>pas</i>	<	<i>passus</i> (L)	歩み、歩調
<i>point</i>	<	<i>punctus</i> (L)	刺すこと、点

後で副詞と見なされるに到ったとき、それにふさわしい自然な意味変化はそれぞれあったが、このケースはいわゆる普通の品詞転換 (conversion) とは明らかに異なる。*marron* 「栗」が形容詞になっても、元の名詞が表す属性は失われない。この三語は丁度、「心」を意味するラテン語 *mens* の奪格が副詞形成語尾 *-ment* になったときと同じような意味の抽象化を被ったのである。その結果現在では、*ne ... pas*, *ne ... point* における *pas*, *point* の元の意味はほとんど意識されていない。(ラテン語の *mica* は、*mie* 「パンの身」*miette* 「パンくず」のような名詞やそこから派生した動詞としてしか残っていない。)しかしながらこ

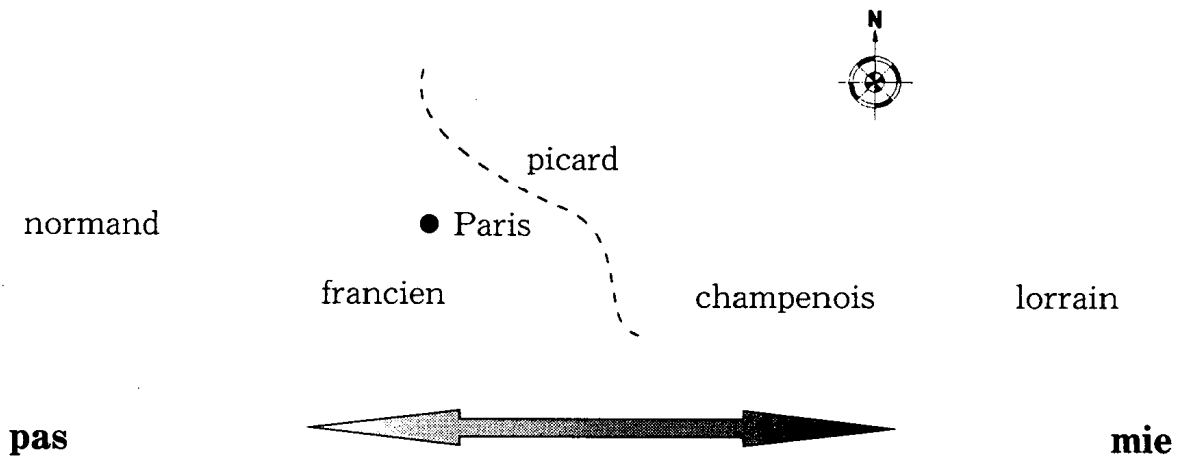
の抽象化は長い年月をかけて進んだもので、その過程も一様ではない。

純粹な否定を表す補助詞として中世において幅を利かせていたのは pas と mie である。次の表は 12・13 世紀の作品における使用状況である。

	時 代	方 言	pas	mie
Perceval	XII	champenois	73	90
Chastelaine de Vergi	XIII	picard	8	7
Colin Muset	XIII	lorrain	3	10
Garçon et l'Aveugle	XIII	picard	1	6
Courtois d'Arras	XIII	picard	11	7
Le Jeu de la Feuillée	XIII	picard	4	26
Aucassin et Nicolette	XIII	picard	0	35
Vie Palefroi	XIII	picard	28	14
Tristan, Bérout	XII	normand	56	11
Roman de Thèbes	XII	normand	83	16
La Vie de St. Th. Becket	XII	francien	92	6
Roman de laRose, Meung	XIII	francien	81	14
Constantinople, Clari	XIII	picard	0	123

- 使用方言は確定的なものではない。作家によっては出生と活躍した場所が必ずしも同じでなかったり、移動があったり、故意に他の方言を用いるなどして、諸方言の特徴が混在していることが珍しくない。⁽⁷⁾

全体的に見て、北フランス（オイル語圏）の中央部と西部は pas をよく使い、東部と北東部は mie をよく使う傾向が出ている。12～13 世紀に実際にはどちらが優勢であったのかを考える際に、注意しなくてはならないことが一つある。それは pas に比べて、mie は脚韻のために使われるケースがはるかに多いということである。Perceval はシャンパーニュ方言で書かれているのだから、mie の数が多いのは納得できる。L. フレによれば、この作品中の mie90 例の内 35 が脚韻に使われているが、pas の方は 73 中わずか 9 例しか脚韻の位置に立っていないと言う。彼によれば、「全体的に見て、12～13 世紀の使用状況は 3：2 の比率で pas の方が多い」らしい。その後の pas の独走の理由として、それがたまたま優勢だったフランシアン方言が標準語の基礎になったこと以外に何が考えられるだろうか。



4. mie の文法化

言語記号が元の語彙的意味を失い、専ら文法的機能を表すものになることを文法化 (grammaticalisation) と呼ぶ。否定の補助詞のように、本来名詞で具体的な指向対象をもっていたものが極端な抽象化を被り、その結果否定という表現様態を担うものになっていったのも文法化の一例である。前述のようにこれは単なる意味変化ではなく、その語が本質的に変わってしまったことを意味する。当然ながら、たいていは変化が完了するまで数世紀を要し、それと共にしばしば言語そのもののタイプすら変わってしまうことがある。

我々は既に補助詞 *pas* の文法化の過程について考察し、文献時代の初期に元の名詞の名残を僅かにとどめた例があることを確認した。⁽⁸⁾ *mie* は先ほども述べたように、元々「食べ物小さな粒」を表していた。*mica panis* (L) はパンのくずのことで、フランス語では主にこの意味で残っている。個々の例がどのぐらい文法化しているかを測る指標は二つある。一つは元の意味がどのぐらい残っているかで、これは一緒に用いられた他動詞が判断の手がかりとなる。もう一つは形式的な基準で、それが *de* + 名詞につながっていると位置関係などが重要になる。名詞の部分がどれぐらい残っているか、どのぐらい副詞化しているかはこの二つの指標によって大体判断することができる。

13世紀前半に書かれた歌物語『オーカッサンとニコレット』には *ne ... mie* が 35 例確認されるが、その内元の意味を想起させるものはほとんど無い。

- | | |
|---------------------------------------|-----------|
| Aucassin n'en fu mie liés, ... | (VI) |
| je nes voil mie oblier, ... | (X) |
| Naie voir, tant n'atenderoie je mie ; | (XIV) |
| Ne vos esmaiés mie de mi. | (XXXVIII) |

ただ量を表す表現と共に用いられているものが 3 例ある。

- | | |
|---|---------|
| il n'en donroit mie un membre por cent mars d'or, | (XVIII) |
| vos n'en donriés mie un des membres por cinc cens mars d'argent ... | (XXII) |
| je n'en puis mie abatre une seule maaille. | (XXIV) |

しかしこの例では *un membre de ...*「一本の…さえも」、*une seule maaille de ...*「…の内の一マイユ (中世の貨幣単位) さえも」と、否定の強調を請け負っているのは *membre*, *maaille* であって *mie* ではない。ここでも *mie* は純然たる副詞として用いられていて、元の名詞の名残は感じられない。

またこの作品の中には、*point* も 2 例だけ確認される。

- | | |
|---|------|
| il ne voloit estre cevalers, ..., ne fare <i>point de</i> quanque il deust. | (II) |
| il ne veut estre cevaliers, ne faire <i>point de</i> quanque faire doie. | (IV) |

point はその後近世になって *pas* に取って代わられるまで、長い間代表的な補

助詞として活躍することになるのだが、中世の *point* は非常に多くの場合次に *de* + 名詞を従えるという補助詞の中では珍しい性質を持っていた。つまりこの段階で *point* は名詞的特質を強く残していたわけで、他の補助詞に比べて副詞化が遅れていたのである。

以上の観察から、13世紀前半の段階で一少なくともピカルディ方言では、*mie* は相当文法化が進んでしまっていて、(現在の *pas* のように) 副詞として純粋な否定を担当していたと判断できる。⁽⁹⁾しかしこのことは少し前の12世紀には必ずしも当てはまらない。

Nil ne set lequel il salut, que *del roi mie* ne conut. (Perceval, 891-92)

後半は *car il ne reconnut rien du roi*. ということであるが、*mie* は *conut* の直接目的語とも考えうる。基底に [*ne ... mie de* 名詞] という形があって、*de* 名詞の部分が自由な位置に立つ。この場合の *mie* は明らかに名詞格であり、13世紀のピカルディの用法と大きく異なる。これをさらに補強する事実として、次の例に見られるように *de* 名詞を *en* で受ける例がある。

e ele n'*an* refuse *mie*, einz l'*otroie* molt volantiers. (Ibid. 5791-92)

補助詞の中で最も成立が古いと言われる *pas* は、文献の最古層にさかのぼっても元の名詞の意味がはっきり感じられる用例はない。ただこれが移動などを表す動詞と用いられた場合に、「一歩も」などと訳しうるケースがあり、これこそ否定の補助詞 *pas* の起源ではないかと文法化たちは言う。⁽¹⁰⁾上の *mie* に関する二例は、名詞であるという点は元のままでも、意味は既に抽象化してしまっている。

E tut mangad les dous gasteals rostiz,

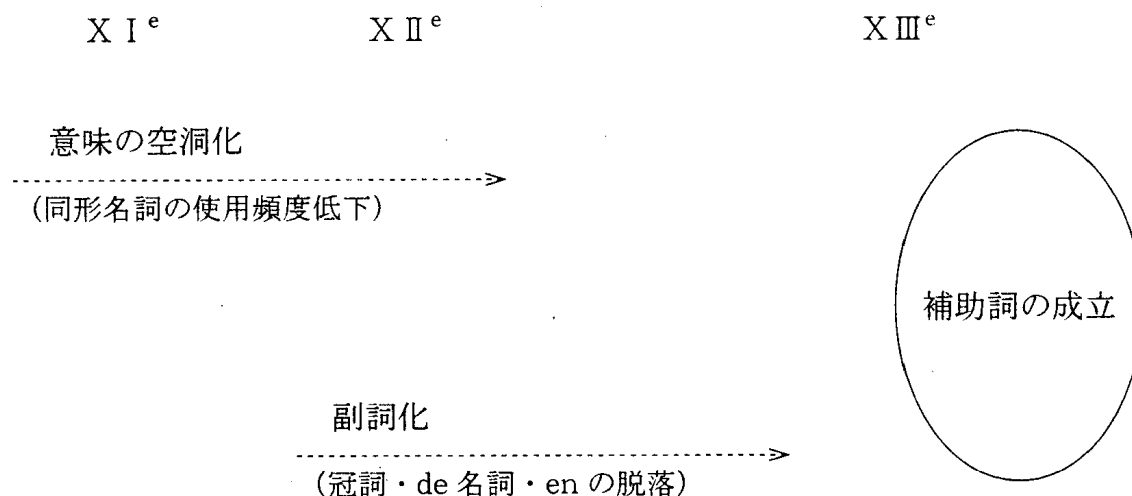
E si que a Guibourc *une mie* n'*en* offrid (Guillaume, 1416-17)

この例では、*de* 名詞を *en* で受けているだけでなく、駄目押しに不定冠詞までついている。しかもこの場合、元のラテン語の意味とほとんど変わらない。

(Les deux gâteaux, il les mangea entièrement sans en offrir une miette à Guibourc.) ⁽¹¹⁾

おわりに

否定の補助詞は文献時代以前に萌芽があったと思われる。pas が最も古く、mie, point の順で続く。残念なのは pas の文法化の過程が確認できないことであるが、それはその後 mie, point がたどったのと同様のものではなかったに違いない。他の補助詞もそうであるが、mie も中世においてラテン語から継承した意味を表す名詞と、徐々に副詞化の進む否定の補助詞が共存していた。⁽¹²⁾だから実際の個々の生起は、中間的なものが現れてもおかしくはない。既に頻度は副詞の方が高くなっていたので、時々元の意味をにおわせながらも次第に否定を表す機能語になっていったのだろう。文法化が完成するまで、副詞化と意味の空洞化がお互いに干渉し合いながら進行したが、どちらかと言えば後者が先行、前者がそれに続いたのであろう。



最後に、中世でこれほど用いられていた mie が、なぜ pas や point に主役の座を譲りまもなく消えてしまったのだろう。mie が否定辞として台頭したのはおそらく意味的な相性の良さのためであり、そして廃れたのはおそらく音声的な弱さのためであろう。12世紀に首都としての地位を確立したパリを中心に持つイル・ド・フランス地方では、前述の通り pas の使用率が圧倒的に高かった。カペー朝の元でフランスにおける政治・経済・文化の中心地として発展してゆく過程で、言語面でもあらゆる影響を周辺に及ぼし続けることになった。言語内の動機だけでなく、このような外的要因も併せて考えるべきなのかもしれない。

【註】

- (1) 浅野 (2003) 参照。
- (2) C. ビュリダンはこの分化が3つの段階を経て徐々に完成したと述べている (pp.700-702)。
- (3) 浅野 (2003) 参照。
- (4) W. von ヴァルトブルクより引用、翻訳 p.50。
- (5) この作品は何度も書き直されている。ここに取り上げたのは加筆編纂されたもの (rédaction interpolée) で、当時の流行と読者の嗜好に合わせて書き直されたものであろう。
- (6) 顕著な違いは語順で、12世紀の方にはS-Vの近代的語順が見られる。この間に急速な変化があったことは一他の種々の事実から見ても一確実である。
- (7) 「13世紀には種々の理由により、文学語となったいくつかの方言が十分な活力を得、地方文化がかなり浸透したので、作家の言語はその作家固有の方言に属さないが、次第に勢力を得、一般に容認されている語形を混用するようになった。」(G. レノー・ドゥ・ラージュ、翻訳 p.5) 統計は、フレ、ビュリダン、東京外国語大学川口裕司研究室HP、そして自身の調査による。
- (8) フレ p.259、浅野 (2003) 参照。
- (9) それはこの作品の中に pas が一度も現れていないことから言える。前節の表の中で、同じピカルディ方言で書かれた R.de クラリの『コンスタンチノーブルの征服』も一相当長い作品であるにもかかわらず pas の生起は0であった (ただし、名詞としての pas 「歩」は確認される)。この時代のピカルディ方言では、おそらく一特に口語にあっては一 mie 一本で pas はほとんど使われていなかったのだろう。クラリはあまり教養のない兵士で、彼の作品を見ると、文体に対するこだわりがほとんど見られず、普段自分たちが話している言葉をそのまま使って書いているのがよくわかる。『オーカッサン』の作者はわかっていないが、同じピカルディの作家たちの中でかなり pas を用いている者は、当時勢力を増しつつあった中央の言語フランシエンに相当通じていて強い影響を受けていたことは間違いない。方言を考える際には、水平的な (地理的な) 視点だけでなく、垂直の視点も必要である。
- (10) フレ、浅野 (2003) 参照。
- (11) 現代語訳はビュリダンによる。
- (12) それぞれ名詞の意味は、point 「特定の場所、瞬間」 pas 「歩、方法、短い時間」 mie 「パンのくず」 gote 「水滴」 rien 「もの」 等。

〔参考文献〕

- Ashby, W. J. 1981: "The loss of the negative particle *ne* in French : a syntactic change in progress" , *Language* 57, pp. 109-137.
- Buridant, C. 2000: *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Sedes, Paris.
- Einhorn, E. 1974 : *Old French : a concise handbook*, Cambridge University Press.
- Ernout, A. & Meillet, A. 1985: *Dictionnaire étymologique de la langue latine: histoires des mots*. Klincksieck, Paris.
- Foulet, L. 1990 : *Petite syntaxe de l'ancien français* (3e éd.), H. Champion, Paris.
- Gaatone, D, 1971: *Etude descriptive du système de la négation en français contemporain*, Droz, Genève.
- Gougenheim, G. 1951 : *Grammaire de la langue française du seizième siècle*, Picard, Paris.
- Hagège, C. 1982: *La structure des langues*, P. U. F., Coll. « *Que sais-je?* » , Paris.
- Harris, M. 1978: *The evolution of French syntax: A comparative approach*. Longman, London.
- Horn, L. R. 1989: *A Natural History of Negation*, The University of Chicago Press.
- Jespersen, O. 1917: *Negation in English and Other Languages*, Lunos, Copenhagen.
— 1924: *The philosophy of grammar*, Allen & Unwin, London.
- Ménard, Ph. 1987: *Manuel du français du moyen âge : 1. Syntaxe de l'ancien français*, Editions Bière, Bordeaux.
- Moignet, G. 1973: *Grammaire de l'ancien français*, Klincksieck, Paris.
- Muller, C. 1991: *La négation en français*, Droz, Genève.
- Posner, R. 1985: *The Romance languages: a linguistic introduction*, Peter Smith.
(ポズナー「ロマンス語入門」風間喜代三、長神悟共訳。大修館。1982.)
—"Post-verbal negation in Non-Standard French : a historical and comparative view" , *Romance Philology* 39, pp. 170-97.
- Price, G. 1962: "The negative particles *pas, mie and point* in French" , *Archivum Linguisticum* 14, pp. 1-34.
- Raynaud de Lage, G. 1959: *Introduction à l'ancien français*, Société d'Editions d'Enseignement Supérieur.
- Rickard, P. 1989: *A History of the French Language*, Unwin, London. (リカード「フランス語史を学ぶ人のために」伊藤忠夫、高橋秀雄共訳。世界思想社。1995.)

Tobler, A. & Lommatzsch, E. 1955-: *Altfranzösisches Wörterbuch*, Franz Steiner Verlag, Berlin.

Wartburg, W. von 1965: *Evolution et structure de la langue française*, Francke, Berne. (ヴァルトブルク「フランス語の進化と構造」田島宏、高塚洋太郎、小方厚彦、矢島猷三共訳。白水社。 1976.)

浅野幸生、2003 (近刊): 「否定の補助詞の文法化について」『ロマンス語研究 36』。